



【研究内容】

- ・(カント) 哲学の方法論の解明
- ・歴史における哲学の意味と意義との解明

【研究目的】

人間とは何かの解明

【今後の展開】

歴史・社会の現実とテキストの言説との分析を踏まえて教育目的の真理への問いの射程のなかで教育の可能性を見定めることによる人間の義務と使命との解明。

【主な研究テーマ／実績テーマと内容】

一貫した関心をもち続けているテーマは、「超越論的对象」概念を核に据えたカント哲学における「超越論的方法」の解明である。(「超越論的对象と統覚」： 隈元忠敬編、『知のアンソロジー—ドイツ的知の位相』、ナカニシヤ出版、1996年、所収)

目下の主要な取り組みは、Kritik der reinen Vernunft (Critique of pure Reason) (「純粋理性の批判」＝「理性『が』理性『を』批判すること」という哲学のことば(カント)と Government of the people (「人民の支配」＝「人民『が』人民『を』支配すること」という政治のことば(リンカン)とのロゴスにおける構造(自己が自己に向かう、自己参照構造)上の照応関係を手掛かりにした「教育の可能性」の解明である。(「教育の可能性と和解への道」： 『ぷらくしす』第16号、広島大学応用倫理学プロジェクト研究センター・西日本応用倫理学会、2015年、科学研究費研究課題番号24320006)

上記との関連における最新の研究成果の内容は以下の通りである。(「教育の可能性と真理への問い—プラトン『プロタゴラス』解釈試論(2)」： 『東京理科大学紀要』第49号、2017年刊行予定、科学研究費研究課題番号15H03153)

ソクラテスのいわゆる「知徳合一」説は、「善悪＝快苦」前提下でのみの主張か、それとも普遍化可能な主張か？ 「悪の方へ自分からすすんで赴くような者は誰もいない」という主張は、さて、善悪＝快苦という前提抜きに、何らか「究極の」善悪を掴み取る、その意味での真知を想定し、そうした真知の所持者であれば「知徳合一」をいかなる留保も伴わずに実現しうる、ということまで含む主張であるか？

これは、「すぐれた人になること」はなるほど「むずかしいけれども、可能である」、がしかし、「すぐれた人であること」は、「不可能」である、というソクラテスの考えからして、「神のみ」がもつ「特典」であり、「人間にできることではない」と考えられている、とまずは見なすべきであろう。

となれば、採られるべき道は、「むずかしいけれども、可能である」とされる、「すぐれた人になる」ことへの超越の試みである。そして、徳が、知識以外のものでありながら、教えられることが、不可能なのではなく、「むずかしいけれども、可能である」と言われていることを踏まえて、この対話のなかで使われている言葉の中から徳性をなすものを探すなら、それは、「知恵」に他ならない。

善悪＝快苦という前提のもとで、知識を計量術的知として善＝快の追求に奉仕することをもっぱらにするものとして限定するとき、そうした知識とは異なるものが知恵の中に存在するはずであり、知恵の、計量術知的な限定的使用のあり方を「知識」として、そうした使用のあり方とは区別される使用のあり方における「知恵」をもまた「知恵」と呼ぶことを、そのアクメーにおいて選び取りつつあるソクラテスをアクメーを生きるプラトンが描いた瞬間がここに見られる。

「知識」や今確認した広狭両様の意味における「知恵」を駆使して問答を通じて徳教育可能の「確信」に伴う「空隙」の充填目指して超越を試みること、それこそが「知を愛し求める哲学の営み」である。そして、いずれこの「空隙」の充填への超越は、「魂の不死」への「確信」において試みられる。

【企業との共同研究の実績】

「得」を目指すのが本来の目的である企業と「徳」を目指すのが本来の目的である専攻(哲学・倫理学)との違いもあり、企業との共同研究は、多分、ない。

ただ、科学研究費重点領域研究「高度技術社会のパーспекティヴ」(1990年)および文部省メディア教育開発センター共同研究「授業評価と授業改善に関する実践的研究」(1999年)に関わったことが、やや「得」寄りのことだったような気がする。